アジア・アフリカ地域研究 第1号　2001年3月

フィールドワーク便り

オルケス・ムラユのある風景

—あるムスリム社会の結婚式—

濵　元　聡　子*

午後7時を少し過ぎた頃，スピーカーの音が鳴り響いてきた．小さな島の全戸全島民に聞こえるような大きな音である．ギターやドラム，キーボードの調音が始まったようである．マイクテストも始まった．これを合図に，結婚式の披露宴に行く人がそろそろ着替えを始めるころである．

ここはインドネシア・スラウェシ島南西半島部に近いサンゴ礁の島．ブギス—マカッサルの人々が多く住む，マカッサル海峡に浮かぶ小島である．島民の99パーセントは，熱心なムスリムである．農業に従事している人は1人もいない．漁業と交易を生業とする人たちが住む人口3,600人の島である．

社交儀礼上，島ではほぼ全戸に披露宴の招待状を配ることになっている．招待状は1,000通あまり印刷され，島ではそのうちの700通ほどが配られる．だが実際には，お祝い金を用意する余裕がないか，列席するほどのつきあいはない人たちがほとんどである．この数年で，祝儀の金額は2倍に跳ね上がっている．ごく普通の近所づきあいをする間柄でさえ，1万ルピア（2000年7月現在，約140円）は包まなければ「けち」だと噂される．祝儀袋には自分の宛名が記された招待状の封筒を使うことになっているから，だれがいくら包んだかは，あっという間に島中に知れ渡ってしまう．けちと呼ばれるくらいなら行かないほうがよいではないか．だが，スピーカーからの音が聞こえてくると，そういった人々でさえ，そわそわと落ち着きがなくなってくる．誰もが，オルケス・ムラユ（*Orkes Melayu*，以下オルケス）の演奏が始まるのを心待ちにしているのである．

オルケスとは，ムラユ音楽（*musik Melayu*）を演奏する楽団のことである．現在ではダンドゥット（後述）を演奏するバンドを指す［田子内　1997］．[1] この島と周辺部の島々では，結婚式というとかならずといってよいほど，披露宴の余興としてオルケスが呼ばれる．大

* 京都大学東南アジア研究センター

1) 田子内によれば，「ムラユ音楽は，タイ南部からマレー半島，シンガポール，ブルネイ，東マレーシア，インドネシアのうちの東アチェからジャンビまでのスマトラ東海岸部と西カリマンタンで演奏されている音楽を指す」という［1997: 139］．イスラム文化の影響を強く受けているため，西アジアや南アジアで用いられている7音階的施法が主流である．元来はマレーの宮廷音楽隊によって演奏されたものであるが，近代では西洋楽器を多く使用しながら伝統的な特徴を有する楽曲が演奏されるようになった．現在の南スラウェシ州ではムラユ音楽という名詞が使われる場合はきわめて稀である．マレーシア音楽という名詞が使われることがあるが，これはマレーシアポップスを指す．

部分のオルケスはスラウェシ島南部の交易港マカッサル市とその南部のスングミナサ市に事務所を構える．披露宴の招待状には演奏予定のオルケス名が記されるから，ひいきのオルケスが登場するとなれば，招待状を受け取った人が，万難を排して披露宴を見に行こうとするのは当然だ．オルケスは結婚披露宴のほか，出産祝いや割礼などさまざまの行事を盛り上げるために呼ばれる．音響機材一式を船に積み込んで，遠隔地の島へ出張することも厭わない．歌い手やバンドマンが乗り込む船は，普段はナマコや魚を探しに行く漁船である．

島で披露宴にオルケスを呼ぶようになったのは，1980年代前半に始まった比較的新しい傾向である．それ以前は，オラン・ラアス（*orang Laas*，Laasは東ジャワの地名，ラアス人の意）のバンドが，バイオリンやスリン（*suling*，横笛），銅鑼，太鼓を使ってその当時の流行歌を演奏していたという．今日では，オルケスが披露宴を盛り上げるのに欠かせない存在となった．

結婚式の第1日目は，アカッド・ニッカ（*akad nikah*）と呼ばれるイスラームの婚姻儀礼が新婦側の家で行われ，その夜には新婦側主催で披露宴が開かれる．このときに呼ばれるオルケスの費用は，新婦側の親族（多くの場合はオジか兄）が結婚祝いとして援助することが多い．第2日目は，新郎側主催の披露宴が開かれ，前日とは異なるオルケスが呼ばれる．

ブギス―マカッサルの人々の社会では，一連の婚姻儀礼にかかる一切の費用を，本来は新郎が負担することになっている．オルケスを呼ぶ費用は，1晩あたり，婚資総額のだいたい20パーセント（2000年7月現在，約100万ルピア：約14,000円）にもなるが，これを呼ぶことで，新郎は，新婦側の親族やその他の住人に「男の甲斐性」を見せることになる．大概の男は，たとえ借金をしてでも新郎側主催の披露宴にオルケスを呼ぶ．昨今は，キーボード奏者と歌い手のみを呼ぶスタイルも登場した．フルバンドに近い演奏ができる高性能の電子オルガンが普及したおかげである．歌い手も3人ほど来るが，費用はオルケスの半分くらいですむ．ただし電子オルガン演奏を選んだ場合，「その程度の甲斐性しかない男」といった評価が新婦側の親族や披露宴出席者から下されることを，新郎は覚悟しておかなければならない．

披露宴が始まるのは午後7時半ごろからで，午後10時頃には新郎新婦と親族一同は退場して，祝宴はお開きとなる．ただし，オルケスは演奏を続ける．深夜2時頃まで，島民がオルケスの演奏をバックに歌うカラオケ大会となる．歌い手の女性たちが島民の歌にバックコーラスをつけてみたり，舞台の袖で踊ってみたりとおおいに盛り上がる．もともと新郎新婦を祝うというよりは，オルケスの舞台を楽しみたいと思っている見物客なのだから，主役が退場したことにも気がついていない．披露宴会場の外には，こういった見物客を相手にしたピーナツ売りや汁ソバ屋台も出ている．腹ごしらえをしながら，カラオケの部が始まるのを待つ者もいるのだろう．

オルケス・ムラユの一般的な構成は，ギター

2名，ベース1名，ドラムス1名，キーボード1名，パーカッション1名，スリン1名に加えて，平均7名の歌い手からなる．歌い手のうち1～2名は男性である．歌い手の女性の年齢は16～25歳で，まれに30代を越えた人もいる．曲のレパートリーは，ダンドゥット（*dangdut*）と呼ばれるインドネシアで広く親しまれている大衆歌謡曲からなる．[2] 誰もがくちずさむことのできる歌ではあるが，歌詞の内容はおそよ結婚式にはふさわしくないものも多い．

しかし問題なのは，歌い手の女性たちの舞台衣装と振り付けである．まるでビキニの水着だと島民に称される露出度の高い衣装，女子プロレスの選手かと見まがうばかりにチェーンを体中に巻き付けている歌い手もいる．あるいはエアロビクスでも始めようとする人，と説明してもよいだろう．狭い舞台をゴムまりのように飛び跳ねる．不必要なまでに扇情的な踊りは，むしろ笑いを誘う．獅子舞のように，長い髪を狂うばかりに揺らすのは，ヘビィメタルのビデオクリップを参考にしたのだろう．露出度の低いロングドレスを身につけている比較的年齢の高そうな歌い手もいる．しかし生地の素材はシースルーで，どこに目を向けてよいのか困ってしまう．いやしかし，誰も困っている人はいないのだ．女も男も，老人も子どもたちも，聖地メッカ巡礼者であるハッジもハッジャも，オルケスの舞台にかぶりつくようにして歌と踊りに夢中になっているのである．

写真1　島民の間でもっとも人気のあるオルケス
歌い手が一巡したら，全員が舞台に上がってこのオルケスのテーマ曲を合唱する．

一方，プラミナン（*pelaminan*）と呼ばれる雛壇におとなしく座っている新郎新婦は，伝統的民族衣装（*baju adat*）を身につけている．きらきらと光る素材の生地は，横糸に金糸か銀糸，縦糸に人絹の太い糸を使った重厚な素材である．女性は頭に金メッキをした金属の飾りを載せている．さらに大きな耳飾りをぶら下げ，金の首飾りを幾重にも巻き付け，人造の宝石を縫いつけたたすきをかけ

写真2　イスラームに則った婚姻の儀礼
akad nikah を終えた新郎新婦．

2) 田子内によれば，「ダンドゥットはムラユ音楽を基本にザピン（*zapin*），インドの映画音楽，ロック等が融合した現代インドネシアの代表的ポピュラー音楽で，グンダン（*gendang*）と呼ばれる片面太鼓とスリンと呼ばれる竹笛が奏でるそのリズム，音色に最大の特徴がある」［1997: 136-137］であるという．

写真3　披露宴の新郎新婦
左側の男性は，オルケスが気になって仕方がない．

る．重いことこのうえない．新郎は腰に短刀を2本差す．新郎新婦の両側に居並ぶ親族は，今日のために仕立てたムスリムにふさわしい露出度の低い長袖の服を着用している．こうした席に優先的に呼ばれる親族は，メッカ巡礼者である．ハッジ帽を被った男たちは，きちっと整列して来客を迎えることになっているのだが，オルケスの舞台が気になって仕方ないらしく，落ち着きがない．始終，首が舞台の方を向いている．ハッジャ用のベール付き帽子を被った女たちも，オルケスの歌い手に張り合おうとするのだろう．このごろでは両袖の部分にシースルーの生地を使ったり，スリップドレスの上にシースル一地の長袖上着を羽織ったりする露出度の高いデザインの晴れ着が好まれる．だが，彼らの晴れ姿を感嘆と羨望のまなざしで見る者は少ない．披露宴の出席者は，誰もがオルケスの舞台に心を奪われているからだ．

オルケス・ムラユを呼ぶ結婚披露宴には，乾季であれば週に2～3回は招待される．雨季に結婚式をすることが禁じられている訳ではない．いつ雨が降り出すかどうかわからないのに，費用のかかるオルケスを呼ぶわけにはいかないからである．私はオルケスの舞台を見るたびに，不思議な気分になる．ムスリムが，こんなに挑発的な衣装を着てもよいのだろうかと心配になるのである．オルケスの歌い手も観客も，どちらもムスリムであることを思えばなおさらだ．この島には，熱心なムスリムが多い．若い人たちが読書をしているので何を読んでいるのかと覗いてみると，たいていはイスラーム関係の本である．人々と会話をしていても，いつの間にか最後には，イスラームの話になっている．私の服装に関しても，「今のままでたいへんよろしい．これからも慎みのない服装（短パンやタンクトップ）をするのではないよ」と言われるのはしょっちゅうである．そんな人々がオルケス・ムラユの舞台を楽しそうに見ている姿を見ると，言動不一致という言葉が浮かんでくる．

意外なことではないが，婚姻儀礼はじつに厳格に行われる．アカッド・ニッカが行われる10日くらい前から，連日，各種のしきたりに則った儀礼が執り行われるし，婚姻が成立してからも数日間は儀礼が続く．その一連の過程の中で，オルケス・ムラユの舞台はやはり異彩を放つものだといえるだろう．とりわけ歌い手の衣装と踊りが強烈な印象を与える．だが，そう感じるのは「この人たちはムスリムのはずなのに…」などとまず考えてしまう研究者たちだけなのかもしれない．結婚式はハレの行事である．だから多少，羽目を外しても許されるということだろうと思えばよいのだ．ムスリムかくあるべし，と

いうことは実際に信仰を持っている人たちが（もし考えたいのであれば）考えることであって，外部の人間がどうこういうものでもない．実際，島の人に，オルケスを呼ぶことはなんとなくムスリムらしくないような気がするのだがどうか，と尋ねてみたこともある．それに対する返答は，「オルケスを呼ばなければ何を呼ぶのだ？」「格好がつかない」「けちだと思われる」というものばかりであった．聞き取りに出かけた先で，VCD（Video CD）でも見ようか，と誘われたことがある．その家の夫婦と近所の人たち（全員メッカ巡礼者）と一緒に，ゆでピーナツをかじりながら見たのは，メイド・イン・ホンコンのピンク映画であった．

本で読んだムスリムとは違う，この島は特殊なのではないか，と当惑したのは初めのうちだけであった．今晩のおかずを賭事の景品にするような主婦たちがいる島に長く住んでみれば，いつのまにか頭でっかちになって作り上げていたムスリム像というものがどんどんと崩れていく．いろいろなムスリムがいてよい．違っていることから見えてくるものをひとつにつなげると，なにか像を結ぶのかもしれない．それを楽しみにして，オルケス・ムラユと踊り狂う島の人々を，頼もしく見ているのである．

参 照 文 献

田子内　進．1997．「ダンドゥットの成立と発展（Ⅰ）—近代演劇の成立とオルケス・ムラユ—」『東南アジア研究』35（1）：136-155．

インドネシアの華人文化

—時代は変わったのか？—

山　本　浩　子*

インドネシアでは，スハルト政権崩壊後の政治状況の変化によって，これまで禁止されていた中国式の獅子舞や龍舞を公の場で目にする機会が随分と増えた．ポピュラー・カルチャーにおいても，中国趣味が盛んに消費されている．

わたしが滞在するジャカルタ近くのタンゲラン（Tangerang）では，旧端午の節句祝いのドラゴンボートレース，ペチュン（爬船，*pehcun*）や，中国寺廟である文徳廟（*Boen Tek Bio*）の例祭が，スハルト時代以前の規模で再開された．こうした行事に顔をだすと，懐かしさとともに将来への希望，不安といったさまざまな感情が，華人参加者の間に交錯しているのを肌で感じる．

本エッセイでは，わたしがこの8ヶ月あまりのインドネシア滞在で華人文化について散見したことを，思いつくままに書いてみた

* 華人文化研究者，インドネシアの華人文化を研究するため，2000年初頭よりタンゲランに滞在中．